

は出来ぬ若し一人が大賢たるの運命があるとし其人が全力を注げば其大賢迄は到達する事が出来るが大賢を踰へて聖域に入る事は出来ぬ其大賢と云ふ程度が即ち運命である、其人の勉強の度に依つては愚に終るかも知れぬ善人で止まるかも知れぬ、愚となり善人となり或は大賢となるは其人の自由で其れには何等の拘束もないが万全の注意を拂わぬに於ては如何に努力するも目的を達し得ないは丁度航海者の不注意にて不慮の難あるのと同じである、人事を盡さねばならぬは其處であると云ふ。



四 顧 寂 莫

三 基 生

ほんとに寒い又雪でも降りそうである、一昨日の様に降つて積ればいゝが……そつと萬年筆を抛て灰色の空を見た、もう時計は四時だ、いつもの掃除とは思つたが餘り寒いので湯をわかしてもらつてからにしよう、と炬燵に入つたパチンと櫻炭がはねる掃除を終へて寒風に吹かれ乍ら側の小高い身延ホテルの空地を彷徨した冬枯のお山は静かな死の沈黙にひたつて行く様である、夕陽は已に思親閣の彼方に落ちて色寂れた薄暗は静かに地を這ひ籠むる、そしてひやりと肌寒い風がしみと食ひ込む様に吹きつける。

靈山を眉前に控へほのかに七面の峰も目に映じ身延町は眼下に見える家並からは夕餉の煙りが淡く立ち昇つて行く谷間のところ々に消え残つたほの白い雪が枯れた草の上に淋しく息づいてゐて二三羽の鳥が鳴きながら舞ひ下りたおどろした瞳であたりをくるりつと見廻りやつと安心した様に歩みながら食をあさつて

ゐる、お山は全く黄昏の色に抱擁されて夕闇は自分の足元まで攻めて来た土産館のイルミネーションは殊更
するどく光つて居る。

ゴーンと響く暮合の鐘の音は淋しく夕空に餘韻長く流し谷間を越えて峰へへと廻つて行く三千四百尺の
鷹取の山の端には氷つた様な半弦の月が輝いてゐる……四顧寂莫朝師堂の木魚仁王門の唱題修行の法鼓の音
が夜の静けさを破つて聞えて来る。
おう寒い……身をふるへ乍ら坂を下りた。



思ひ出の記

鳥海山人

三月の末つ方とは言へ、残雪の上を這つて来る風は、かなり膚にこたえるほどであつた、止めどもなくい
らだつて来る心は、一種病的とも思はれた、幼い時から撫でつ、叩きつした根木橋の畔に樹つてゐる柳は葉
は落ち盡して幹は真黒に、何處に春が籠つて居るとも見えない、併し春はきつと来る、春が来て死んだやう
な柳は緑に息ふきかへすのもわづかばかりの間である、然し吾生の春は何時、吾芽の吐くは何れの日であら
うかと、あせる心の抑揚は順調を得て居らなかつた。

此の柳を後にしてから、もう四年も経つてゐる、流石朝からの往來の繁く、立ち並ぶ店の賑合も、成程日
本一の都と思はれた、此の中からは何物かを探し得られるであらうと、先づ一驚したのも過去となつて終つ